

## 読書通信



No. 112

① トップに漫画を取り上げるのは初めてだが、竜田一人『いちえふ 福島第一原子力発電所労働記(1)』(講談社、578円)はそれにふさわしい内容である。「売れない漫画家」だった作者はいろんな経緯から「いちえふ」(福島第一原発のことを地元では1Fと呼ぶ)で働くことになる。構内(原子炉建屋を除く)で働く一部始終が詳細かつ丁寧に描かれるが、無残な爆発の跡や過酷な作業現場を語るに漫画は写真や文字以上の力がある。無責任なネットやメディアがあるおる放射能不安をやりわり否定し、放射線より

も熱中症のほうがはるかに切実だとか、作業員たちの心の交流や存外に重いひと言がユーモアを交え飄々とした筆致で語られるのもいい。ドキュメンタリー漫画の傑作として(値段も安いことだし)たくさんの人に読まれてほしい。福島ついでに門田隆将『記者たちは海に向かった』(角川書店、1728円)も推薦しておこう。津波と原発事故に直面した『福島民友新聞』の記者やスタッフが被災者と停電の中でどのように取材、編集、印刷、配達したか。当事者の心の奥にまで入り込んでルポした、これもまた力作である。社員たちの人間性、記者魂、読者や取材先との距離感、原発への思いなど地方紙ならではの、ずしりと心に響いてくる。

② 「29歳の社会学者が突く日本の弱点」とい

うコピーに引かれて読んでみた。そういえば近年、論壇の売れっ子としてよく見る名前と顔だ。東大大学院の博士課程在籍という。古市憲寿『だから日本はズレている』(新潮新書、799円)は「リーダーなんていらぬ」「クールジャパンを誰も知らない」「ノマドとはただの脱サラである」「若者に社会は変えられない」など、世間の常識を覆そうという気負いが全編にあふれる。個人的な感想は賛否さまざまにあるが、問題提起は概して面白い。若者よりおじさんたちに向けて発信したかったのだから、「大量の犠牲者を出す革命も起きず、植民地支配も経験しなかった」幸せな日本、という文言は違和感を覚えた。戦争を知らぬ世代は怖い。

③ 人気評論家の書いた最初の小説、孫崎享

『小説外務省』(現代書館、1728円)は尖閣諸島をめぐる日中の争いを中心テーマに据えて「アメリカカベつたり」の外務省の実態を暴いている。実名で登場する日米中の政治家や官僚に歴史的実情が織り込まれて、主人公の外務官僚(男女とも言動が甘い)以外はほぼ真実かと錯覚する人もいよう。尖閣を手軽に理解するにはいいが、小説としての熟度は少々物足りない。

④ 竹村公太郎『日本史の謎は「地形」で解ける』(PHP文庫、761円)は読ませる。「なぜ日本は植民地にならなかったか」「なぜ江戸は世界最大の都市になれたか」「なぜ家康は利根川を東に曲げたか」など18の「なぜ」を地文学と気象学から鮮やかに推理している。読めば誰かに「答え」を吹聴したくなるだろう。(純)